

里地通信 11月号

発行：里地ネットワーク事務局 〒105-0003 東京都港区西新橋1-17-4西新橋Y Kビル6階（財）水と緑の惑星保全機構内
電話：03-3500-3559 FAX：03-3500-3841 e-mail：QWS04137@nifty.ne.jp ホームページ： <http://member.nifty.ne.jp/satochi/>

里地セミナー報告 エコツーリズム



講師：瀬田信哉さん
(財)自然公園美化管理財団 理事
1999年7月17日

里地セミナーの報告です。今回は、スライドや添付資料が豊富にありましたが、すべてを掲載できないため、分かりにくい点があるかと思えます。資料は事務局にありますので、関心のある方は、お問い合わせください。(事務局)

はじめに

エコツーリズムの話をとということで用意したペーパーとスライドは学生さんなどが対象とうかがったものですから、海外に焦点を当てたものになってしまいました。日本の事例を紹介した方が良かったと悔やんでいます。

エコツーリズム論争

皆さんのお手元にお配りしたのは、国際観光開発研究センターという運輸省の海外協力団体の専務理事の新井さんの文章です。この文章の要点を一言で言うと「観光促進のミッションでコスタリカへ行ったが面白くなかった」ということです。次に交通の便について、モンテ・ベルデというエコツーリズムの対象でいいのに、そこに到達するための道路が悪いから、しっかり整備するべきではないかとも書いてあります。3番目に、首都のサンホセに戻ったときに動物園や博物館につれていってもらったらジャガーや幻の鳥ケアツールや熱帯蝶もたくさんいた。そういう所に初めて連れて行ってから森の中に連れて行けばいいのに、森の中で乗ったトラムでは鳥にも蝶にも会えず失望したということが書いてあります。

その右側にあるのが「異議あり」と題する読売新聞の記者の反論です。サンホセというコスタリカの首都でラムサール条約締約国会議があって、環境庁や諫早のネットワークの方々も参加したので、その取材のときに参加した同じ様なツアーの報告です。動物が見え

ないから文句を言うのではなく、そういう中にいて満足するのがエコツアーの本質ではないかと書いています。

この熱帯林で動植物をどう鑑賞するかというと、空中ケーブルに乗るのです。地球上に150万種の動物が見つっていますが、実際はその10倍から20倍の動物がいるでしょう。そしてそのほとんどは脊椎動物ではなくて昆虫です。こういう熱帯雨林ではちょっと歩いても新種が見つかるくらいです。私達は地面を歩いています。虫の種類は上に上がるほど増えて、ちょっと高いところにいると10倍くらいになります。それは太陽光線のせいで生物の多様性が豊かになるのです。熱帯を歩くと地面の近くはひやっとして静かな感じで、真っ暗というわけではないのですがそれに近く、動物の少なさが実感できます。実際パナマのある場所で地表の昆虫の種類を調べただけでは新種はあまり見つからないが、薫蒸をして落ちてきた虫を調べると、そのうち90%以上は今まで分類もしたことのないような虫だった報告もあります。つまり熱帯林の研究というのは下を歩いていたのでは全体が見えないんですね。

だからこそ、こういう日本の川の籠の渡しみたいな乗り物で見学したほうがたくさん生き物が見えるのです。それならひとつ、熱帯林を旅行者へ見せる方法として、そういう方法を考えようということになって、この乗り物をコスタリカに二つ作ったんです。エアリアム・トラムと呼んでいる空中ブランコのことで、ひとつはカラーラという所、もう一つはサンホセに近い、ブラウリオ・カリージョという国立公園の近くにありま。そういう工夫の元にできた乗り物なのです。

新井さんの記事を読んで多くのNGOは憤りました。そして、これだけのツアーに出て感動できないというのはよっぽど不幸な人だと言っています。新井さんも私の知人で観光開発のエキスパートですからアクセスの改善など観光政策に関する意見には拝聴に値するところもあるのですが、エコツアーを楽しめるかどうかというのは主体である自分に関わっているところが大きいのです。

エコツーリズムの向こう側

これは、4年前に書いた文章です。エコツーリズムは単なるエコツアーとは違います。個人が行うツアーが全体的な社会現象の中で体系付けられてはじめて「エコツーリズム」になるのです。エコツアーという

のはエコツーリズムのひとつの具体化だと思っています。

エコツアーの成功というのは自然にどう向かい合うのかということにかかっているのだと思います。「向こう側」という言葉を使ったのは「対岸」という意味で、こちらの岸にいますままでエコツーリズムをどうしようと言っているのではなくて、行ってみなくてはならないという皮肉のつもりで書いたのです。

日本でエコツーリズムを環境庁自然保護局が捉えたのが1990年です。ちょうど地球温暖化の問題が注目されている中に熱帯林の問題があって、熱帯雨林の伐採問題に環境庁はどのように対応するのかというレポートを同庁が書いたのです。

(1) 伐採したら植林をする、(2) 植林の際にユーカリとか本来熱帯雨林的でない木を持ってくるのではなく在来のものを植える、というような報告書だったのですが、これでは林野庁のと同じだと、環境庁らしいものがないのかと言われて調査しなされたのです。

東南アジアでは国立公園に指定したからといって自然が守られるということにはなりません。国立公園が焼畑対象になってしまう事もあるのです。欧米のアドバイザーに従ってヨーロッパ式・アメリカ式に国立公園を指定し、保護区を拡大するという考えは役に立ちません。原住民を追い出して、その中を守ろうとしても、またいつかその人たちが戻って来て、生活のために徐々に徐々に木を切っていくからです。そこに住んでいる人たちは西洋化されているわけではありません。ところが、インドネシアにしるマレーシアにしる、そういう所のエリートというのはアメリカやオックスフォードに留学してくるので西洋化された保護思想を持っているわけです。ベトナムでも国立公園を守ろうとしていますが、うまく行きません。

私達は原住民の人たちの存在を前提に、木を切ったら皆さんが損する、それを守ることによって得になるような保護方法を考えていかなければならないと考えたのです。その時吉良龍夫さんが「そういうのをエコツーリズムと言うんだ」と教えてくださったのです。

エコツーリズムの定義

エコツーリズムの特徴を一つ申し上げるならば保護地域のための資金を作り出すことに目的があるということです。地域社会での雇用機会を作り出すことによ

って、経済的に成り立つようにするのです。さらに地元の人と訪れる人の両方に対して環境教育を提供することによって自然志向型の観光を生むことも重要なポイントです。

この7、8年はそういう方向へ向けようという努力をしているのですが案の定難しいようです。配付資料で様々なエコツアーを紹介しましたが、エコツアーというのは自然保護のためにお金を出せばいいのだという思いこみがあったり、サファリパークに行くことをエコツアーと試してみたり、原発や開発反対運動見学支援の旅をエコツアーというなどの、他にはこういう例もあります。お手元にお配りした富士山コンサートツアー、これにもエコツーリズム体験と書いてあります。このツアーの中で河口湖でごみを拾うのですが、これがだしになっているのです。言葉と実態には大きな差があるようです。

ベネズエラ（コスタリカ）の エコツーリズム

続いてスライドで海外のエコツーリズムのパターンを見ていただこうと思います。まずコスタリカ。

コスタリカは森林が1940年代は70%もあったのが1980年代には15%になってしまった。それが全部コーヒー園になったというくらいコーヒー園が多く、コーヒーの輸出が第一の外貨獲得資源だったんです。しかしここ2、3年内には自然環境を利用した観光収入が第一になった。

私はポアス火山国立公園という摩周湖のような森林の山中にある湖に行きました。雲霧林と言って、いつも霧をかぶっていて、ちょっと晴れたと思っても、すぐに霧がかかって景色が見えなくなります。そこで、そこを訪れた観光客は霧が晴れるまでずっと待っているのです。車を降りてからそこに着くまで1～2時間歩かなくてはならないのですが、ラジカセを持って行って適当に踊り出したりしたり、サンドイッチとココアを持って行って食べたりしながら待つのです。昭和30年頃の日本の観光によく似ているともいえますね。

このあたりの地形や生物についてはレンジャーが説明してくれるのです。スペイン語ですが。

< 国立公園 >

では実際に国立公園のスライドを見ましょう。まず

はその国立公園の下流の川で、国立公園から流れてくる支流の水と、コーヒー園などの畑地から流れてくる水が合流する地点です。左側のコーヒー園側から流れてくる水がずいぶん汚い茶色なのが見分かります。国立公園側の水はきれいですよね。



さて、これが最初にお話した空中ゴンドラの乗り物です。ラムサール会議に出席した柳田さんという女性から借りた一枚ですが、このリフトに乗ります。ケーブルにいくつもリフトチェアが着いていて後ろの人が乗る時はケーブルの動きが止まるので、空中で待たされるのですが、その時にゆっくり生き物を見ることができます。単純な作りで、一つのリフトに乗られるのは5、6人まで、それに必ず一人レンジャーが同乗します。彼女のリフトには日本語で説明してくれる人がいたということです。往復1時間で、70ドルです。

これはギアナ高地のヴェネズエラ側にあるカナイマというキャンプのもので、この飛行機が首都カラカスから国立公園の入り口に横付けにされます。逆にいうと飛行機の他に現地へのアクセスがないのです。この飛行機は民間会社のようですが、B737ですか。次のこれは戦争の頃の飛行機DC3なのですが、あまり天気

は良くなって、心配でしたね(笑)。

国立公園の入り口で、受付をして飛行機で行くか、ある程度船でさかのぼるかの選択をします。地図を見ると、970メートルの世界一の落差の滝があって、それを見に行くこともできます。泊まるのはここです。飛行機が着いたところから少し行ったところにあるキャンプ地です。すぐ側に湖があります。

この船で案内する事業を行っているのは現地人のインディオなのです。観光客を入り口まで運んで来ると、飛行機での観光、それに宿泊経営は航空会社が経営しますが、船での川上りや川下りをする際に船を操るのも滝巡りなどの案内をするのもインディオです。ロッジから先は地元の人にすべて任されているといえます。



川をさかのぼれば、先住民の人とも会話し、中州みたいなところにつれて行ってきて「これが私の娘だ」などと紹介をしてくれるのです(笑)。織物をしているのを見せてくれたりもします。ここでは特に何を売っているというわけでもなくて、キャンプに帰ってから売店で買うのです。私は吹き矢を買って帰りました。

現地の人には他にも古い遺跡らしいところに連れて行ってきて、いろいろ言っていました。良く分かりませんでした(笑)。他の観光客はアルゼンチン、イタリアの人で、ラテン系だと言葉はよく通じるようです。そういえば、このツアーには水着持ってこい、と書いてあって、滝ノ下を歩いていく時に水着に着替えるのです。日本人は持っていなかったのですが、欧米の人はちゃんとそういう格好をしてきていました。

キャンプ地の真中には食堂棟があって、向こう側にインディオの居住区があります。食事はこういうところで行えます。

<自然の多様性>

この辺りの自然の風景は大きな木は1ヘクタールに2本くらいしかないのです。同じ種類の木はせいぜい10本くらいと言うくらい多様性にあふれています。高木がこういう風にぼこぼこ見えね。花がにいつせいに咲くのを見ることができればすばらしいと思います。

ここにいる生物も多様です。これは「ヤドクイチゴガエル」です。苺みたいだがジーンズをはいたカエルだといわれています。次は「ハキリアリ」です。葉自体を食べるのではなく巣に持ち帰って、これで醗酵させた茸を食べるのです。お互いに協力し合う、つまり社会性があるといわれています。中には遊んでいるやつもいるんですがね(笑)。このスライドなんて帆掛け舟を見ているようですね。これは「ハミングバード」です。ホバリング蜂くらいの大きさの鳥です。

ハワイのエコツーリズム

続いてハワイのエコツーリズムをご紹介します。ハワイ旅行という人はよくワイキキのあるオアフ島へ行きますが、今回私が参加したのはビッグアイランドでのエコツアーです。

このスライドの二人、“ロブ”と“まさ君”が案内をしてくれました。ポルトガル系の“ロブ”は養蜂業者のお父さんについて西海岸からハワイに移ってきたそうです。昆虫に詳しいお父さんの知恵を受け継いで、彼はその知識を生かしながらガイドをしているそうです。“まさ君”はフロリダ工科大学でハワイのエコツーリズムという修士論文を書いているそうです。彼の車の中からいろんな物が出てきて、いろいろと役に立ったことは後からお話しします。

ハワイ島自体の西海岸は乾燥しています。高い山としてはマウナロアとマウナケアが有名ですが、その山を越えるとすごく雨が降るといのが面白いです。島のあちこちで変化に富んでいます。

朝8時くらいに迎えに来てもらって、家内と一緒に出かけました。10時ごろになると、ランチとしてロブの奥さんが用意してくれた手弁当を食べます。ツアーの参加費は一人120ドル。それ以上出して高いものを食べなくていいように、朝の弁当、昼の弁当を提供してくれるんですよ。(次ページ写真)

まず、上から200メートル以上落下する滝を見、稜



線を越え、熱帯林、侵食された谷を見ました。なかなか迫力のあるものでした。そうやって歩きながらいろんなネイティブの人が自然とどう付き合っているかという話を聞けるんです。これその一つのあらわれである水路です。山の向こうの非常に雨が降るところから乾燥地帯のほうへ岩盤をくりぬいて水路を作ったものです。日系の一番初めに移り住んだ人がこつこつと作り上げたということです。その過程で亡くなった人の碑もあります。今は水路を使っていないのですが、まだその跡をカヌーで鑑賞できるそうです。カヌー体験ができるツアーを組んでいる日本の会社があるんです。日系3世の方が経営しておられます。でも、元水路だから狭いんですよ。それであちこちがつかえて衣服が黒くなってしまふ。それに対して「中をちゃんと掃除しておけ」という客もいたそうですが、それなら来ていい、と断ったそうです。(笑)

ハワイでは様々な遊びができます。釣りをする人、カヌーをする人、いろいろいます。まさ君はダイビングをやると言っていました。それで、「ダイビングもツアーのオプションなのか」と聞くと、「ダイビングは別の人がやる」というんです。ハワイ島ではアクティビティを全部やれるエコツアー会社をやるとするのはルール違反なのです。「お互い紹介しあえばいい」ということを言っていました。

グローバル化とかグローバルスタンダードとなると何でも用意して提供するという“デパート化”の可能性がありますが、あえてハワイ島ではそういう形にはしていないのです。これがハワイ島の美德だと言っていました。ハワイではこの一点専門主義でお互いが「貸し借りしあう」ということです。

次は簡易トイレです。彼らは土地のプライベートな所有者と契約して、トイレを別の会社からレンタルで

借りているそうです。1カ月に120ドルだと言っていました。それで、毎月のトイレのメンテナンスまでしてもらえるのだそうです。ちゃんと水洗ですよ。水が流れて自動的にストックできるようになっているのです。

森に入る前に、まさ君の車の中からこんなブラシが出てきました。皆、森に入る時は靴についている種子や土を落とします。そういう風にして外の植物が進入しないようにするのです。

これが中の様子です。



山刀を持って入って、倒れている木性羊歯を見つけると下のほうからどんどん斜めに切ってしまいます。なぜかと聞くとマラリア対策だそうです。ここには700年前くらい前にポリネシアのほうから持ち込んだ野豚がいるのです。その時はちっこい子豚でした。しかしクック船長がハワイを発見して、ヨーロッパから大きい豚が輸入されました。この豚は羊歯の中でんぶん質を食べるため、次々と木性羊歯を押し倒します。そうすると水溜りができます。木性羊歯の倒れたところにはマラリア蚊が発生します。マラリア蚊自体も捕鯨船が寄港した時に飲み水の中に蚊の卵が入っていて、その卵が孵ってしまったのですから原住民の人にとっては迷惑な話です。このマラリア蚊は人間には害を及ぼさないのですが、ネネというハワイを象徴する鳥のまぶたを刺して、絶滅近くにしてしまったということです。

こういう話がゆっくり聞けるのはエコツアーの長所です。丁度私達がキラウエア火山の溶岩湖の展望台にいる時に、日本から“ハワイ四島ツアー”などというバスが来たのですが、見ていると一番最後の人が降りたら最初の人はずっとバスに乗らなくてはならないという慌ただしさでした。現場に立ってゆっくり説明を聞くどころではなく、見終わったらすぐにバスに乗って

下さいと急かされていました。ハワイに行ったといってもその歴史や自然についてまったく説明が聞けないのです。バスの中では面白おかしい案内はあるのかもしれませんが、その点私達は溶岩が流れた跡とか、その中に交じる鉱石の種類とかを聞くことができるのでした。

空気が綺麗なのでハワイのマウナケア山頂には“すばる”のような天文台が10台以上あります。その一つは、NASAがお金を出して、ハワイ大学が使っている天文台です。土日は一般の人向けに開放してくれて、いろいろと説明してくれるんです。そういうことが許されるというのは日本にはないことだと思います。

ハワイ島の一番南にある木は、一定の風がずっと吹いているので、木の枝が全部島の内陸に向かって傾いています。ここには三菱の作った風力発電もありました。

フランスのグリーンツーリズム

外国の事例としては最後に、フランスのポッフォーという町の話をしていきます。里地、というより日本で言えば山村でのグリーンツーリズムに相当するものです。

これが村の全景です。谷底には高い建物を建ててもいいのですが、山の傾面上にも行くほど建物の高さの規制が激しくなります。

町の中心に観光客用に6000ベッドくらいのコンドミニウムがあり、離れたところに農家があります。これ以上に旅行客の需要がある時は村の中心部ではなく山間に散らばる5、6軒の農家に優先して増築を許していくそうです。コンドミニウムや民宿には、大体1週間単位で分宿します。第1日目に観光客のための説明会が開かれ、翌日からのアクティビティの方法を説明します。

増築の許可をはじめ、ここでは標高が高いところで牛を飼っている農家に対して多くの補償がなされます。どうしてかということの説明のために、まずアレッシューの協同組合のしくみをお話しします。

アレッシュュー・ボーフォーでは標高800~2300メートルという高いところで採れた牛乳を使ってチーズを作っています。チーズ作りは協同組合で行います。当然上の方の農家の牛乳を運び出すには大変手間がかかります。夏はまだしも、冬はスノーモービルで運ぶためコストも馬鹿になりません。そこで、かつてこれらの標高の高いところの農家を切り捨てようという意見

がでました。しかしやがて実は高いところの野草を食べている牛の乳の方が品質がいいということが分かってきました。また、牛がいることによって、夏の間の山の野草の保護と保全が可能になっており、それが素晴らしい風景・またとない観光資源になっているということも分かってきました。ポッフォーへ来る観光客の方がその景色を愛してくれ、チーズを買ってくれるのだから、高地で牛を飼う農家とその他の農家は一体だと、協同組合の方は考えたのだそうです。そして、山岳の人が景観でチーズをPRしてくれているのだから、切り離すのはやめようという結論になったのです。こうして標高の高い農家を保護しつつ、味は世界に有名なポッフォーチーズが生れるのです。日本の農業政策もデカップリングというのでしょうか、中山間地域、里地の農家対策が大きなテーマになっています。フランスも山地の多いローヌアルプス地方政府も地域も農業関係者もその問題に大きく関わっているようです。

さて、これが私達が泊まった農家民宿です。



農家の方は2階に住んでおられて、この地下の部分に昔は牧草を入れていました。今はそこがベッドルームになっています。改装はしていますが、本体は150年くらいたったものでしょう。向こうの家は頑丈で、風格を持ったものが多いようです。好んで本物のものを使うということが明らかです。

ご飯は、チーズとジャガイモ。バカンスの客のためのものです。

日本のエコツアー

私はエコツアーであるためには(1)マイクを持たないというのと、(2)ワッペンをつけない、(3)旗を持たないという3点が必要だと考えています。ワッペンや旗を持つと、参加者がいつもその人を確認する

ことに夢中で自然を楽しむことが二の次になってしまいます。また、マイクが必要なほど多くの人間を一度に管理しようということがおかしいと思います。ガラパゴスでは16人に1人ガイドがつく規模で班分けしています。それ以上にしないのが本来のエコツアーの姿です。肉声で説明ができ、それぞれの興味に対応できる規模がベストだと思います。

グリーンレター

最後にこの雑誌を差し上げます。

このグリーンレターは富士フィルムから15年前に公益信託ということで預けていただいて、この利息で富士の森という森を作ったり、富士グリーンファンド(FGF)での企画や、いろいろな環境保全活動調査に毎年助成をしています。これらの活動の一環でこの広報誌を年1回刊行しています。

この号のテーマは3人の在日の外国人に取材に行っ

て、100年前の明治の頃の日本の姿と比較して今を語ってもらうことにしました。

編集後記にこんなことを書きました。海外国の人は明治の初めに日本の自然を見た時に“庭園のような国だ”と言ったのだそうです。田畑も実にていねいに耕していたからです。イギリスもそれを見習って庭園技術や田園景観の保全思想を深めたのだそうです。

ところが明治政府はそのいいところに気づきませんでした。明治4年から岩倉具視らが1年半くらいアメリカとヨーロッパを視察しましたが、リバプールやマンチェスターのような工業都市ばかり見てきて、駅と駅間の風景にまったく関心を持たなかったのです。そして帰ってきてから日本も工業化に突っ走ったのでした。

そろそろ日本も昔のような国土への愛情を持って国土計画を作っていく必要があるのではないのでしょうか。

事務局からのお知らせ

投稿のお願い

里地通信では、毎回、会員の皆様に事例報告をお願いしております。皆様が取り組まれている活動について、自己紹介を兼ねてご報告いただき、広くネットワークに役立てるのがその目的です。

事例や里地づくりにかかわるテーマについての論文など、ぜひお寄せください。また、その際には、写真や図表などを添えていただきますようお願いします。

なお、里地通信掲載後は、ホームページへの転載をさせていただきます。さらに、今後、里地ネットワークとして事例集の発行などの際に、執筆者と相談しつつ役立てさせていただきたいと思っております。

投稿に関しまして、原稿用紙での執筆、郵送、FAXでもかまいません。ワープロ、パソコン等で書きの場合、テキストデータをフロッピーや電子メールで送っていただければ、そのまま使えます。

「里地」実践テキスト好評販売中

「里地～人と人、人と自然が共生する地域づくりをめざす人へ」の実践報告、論文集はおかげさまで、各地で好評です。(次ページ事業経過報告参照)引き続き、テキストの販売を行っております。会員割引や大量部数割引もしております。事務局までお問い合わせください。

なお、定価は、1冊1,500円(送料込み)5冊以上1000円です。

99年度の事業経過報告

報告：事務局長 竹田純一

今年度もはや半年が過ぎ去ってしまいました。里地ネットワークは、初年度の昨年度、里地における地域内循環と人と人、人と自然との共生、住民の参加という観点から全国各地で行われている活動概要を把握することに努め、シンポジウムと調査研究、セミナーの開催を行いました。

このため、シンポジウムでは、地域住民の方々の参加を重視し、セミナーでは、会員の方の参加に重点を置きながら里地で活用できそうな共通概念の整理と具体的な手法や技術の習得に努めてきました。また、上記とあわせたパブリシティーに力を入れてきました。

本年度前半は、初年度の基盤の上に、いくつかのモデル事業を行ないながら、ネットワークの意義と活動の進展へ向けてのネットワークのあり方を模索してきました。

本日お送りする里地ネットワークの公開名簿は、循環・共生・参加という概念の基に共感いただいた方々の名簿であると思います。残念ながら、すべての人にお会いできているわけではありませんので、確信はもてませんが、少なからず、長期的なビジョンを共有している人々の輪であると信じています。

この方向での名簿の相互活用をしていただければ幸いです。

本年度前半の里地共生事業

地元学による市町村職員研修

(財)三重県自治会館組合の依頼により、本年6月から合計8回にわたり、三重県69市町村の職員を対象とする地元学の実施研修を行いました。熊本県水俣市の吉本哲郎氏によって提唱されている地元学を取り入れた研修です。課長職を対象とする1泊2日の研修と、30歳前後を対象とする2泊3日の研修に分けて実施さ

れました。里地ネットワークでは、講義部分とフィールド調査の実施、道先案内をおこないました。この研修を通じて、三重県内の8町村の調査を同時に行うことができました。

テキスト「里地」の企画編集

この職員研修のテキストとして、また、地元学の実践テキスト、集落自治、住民自治の実施手法のテキストとして「里地」を発行しました。このテキストを通じて、国土緑化推進機構「グリーンカレッジ」、全国農協乳業協会、酪農プラントを対象とした新たな活性化手法の研修...他を実施しました。

里山保全活動

イオングループ環境財団と里地ネットワークの共催による里山保全活動を開始しました。「里山の暮らし・共に生きる文化を発見しに行こう」をテーマとして、各地の里地・里山での保全活動をより活性化させ里山文化の伝承と人と人、人と自然が共生するしくみを学ぶことが目的です。具体的には各地の里山保全活動には、それぞれに課題や障害がつきものだと思います。地域での活動とイオングループ、里地ネットワークがパートナーシップを組むことで課題の解決と活動の活性化、および、新しい活動を産み出していくこと目指しています。実施期間は3年間を前提としています。

初回は、今号で添付している鳥海山にブナを植える会との共同作業でした。鳥海山では紙芝居づくりのワークショップとスライドショー、人形劇づくりを薦める事で、活動の輪とあらたな組織「鳥海山大好き劇団“えぼっく”」が誕生しました。人形劇、紙芝居、スライドショーをもった鳥海山山麓の保全活動劇団です。

2回目は、昨年地元学を行うことではずみみがつき、現在、老人クラブが竹炭を焼きつづけている愛知県美

浜町です。来年2月に雑木の炭焼釜づくりをします。このほか、3月には鳥根県での野焼き、本年度準備して来年度の4月に長野県飯山市小菅の里での小鳥の森の保全活動などを実施する予定です。

新田園生活のすすめシンポジウム

国際航業(株)ライフクリエイイト部との共催により、団塊の世代で企業戦士といわれた層を対象とする、もう一つの暮らし方、田園生活の楽しさと配慮事項を伝えるシンポジウムを実施しています。現在は論文の募集も行っています。

日刊工業新聞社

「グリーンジャーナル」への寄稿

「里地だより」は、本年度2月号より毎月里地だよりを連載しています。きっかけとなったのは、昨年8月号の里地、里山特集でした。見る機会がありましたらバックナンバーからぜひとも見てください。図書館などでも見ることができると思います。購入の場合は、1冊2000円です。

今年度後半の事業

エコ・テクノロジーのレビュー

環境庁委託調査で、里地における温暖化防止技術のレビューを行います。来年3月までに検討委員会と調

査を行い、わかりやすい里地でつかえる技術集を作成いたします。さまざまな技術とプラントの索引簿とともに、環境保全と地域活性化のバイブルとなるように努めています。詳細は次号以降でお伝えします。

地域新エネルギービジョン作成

環境庁のエコテクのレビューと同時平行して、東北電力グループの東北緑化環境保全株式会社と共同して、岩手県湯田町の地域新エネルギービジョンの作成のお手伝いを行います。特別豪雪地帯、温泉熱、地熱、木質、水力、風力...。酪農、製材所も加えると湯田町は、自然エネルギーと資源循環を考える上で最適な地域です。このビジョンづくりは、地元学的な手法を用いて、エネルギー探検隊と、環境庁のレビューを合わせた検討を行います。もちろん東北電力グループの専門性の上に、里地ネットワークのソフトを組みあわせて実施研究です。あなたの地域でも来年度実施しませんか。

水俣型グリーンツーリズム本の出版計画

昨年度実施したエコ水俣フィールドツアー、そして本年度実施したモニターツアーをベースにして、水俣を旅する本の出版を企画提案しています。水俣のどこをどう歩けば、水俣がわかるのか、環境先進地水俣から何を学ぶのか、修学旅行で、個人旅行で、そのツーリズムの楽しみ方、学び方を伝えます。

イベント・募集案内

懸賞エッセイ募集

「私が憧れる田舎暮らし」をテーマにした、作文を募集しています。都会であたらしい生活をしてきて、ふと自分の人生に立ち戻ったとき、自然に囲まれ、ゆったりとした時間の中にある田舎暮らしをふと思い立つ。あなたが憧れる田舎暮らしの姿を作文で表現してみませんか？

募集内容：テーマは「私が憧れる田舎暮らし」

応募規定：縦書き400字詰め原稿用紙（ワープロ原稿の場合は20字×20行で印字）5枚程度。表紙をつけ、作品タイトル、住所、氏名、年齢、電話番号、職業を明記し、郵送。

応募資格：35歳以上

締め切り：平成11年11月15日（月）必着

送り先・問い合わせ先：

国際航業（株）ライフクリエイティブ部エッセイ係

〒102-0081 東京都千代田区四番町7-15

四番町ファインビル5F

賞：最優秀賞（20万円＋有機農産物野菜詰め合わせ）以下6賞

セミナー開催

都市近郊の里山の保全

～里山保全への現代的な課題を考える～

都市近郊に残された里山を保全しようとする場合、以下のような課題に直面します。

（1）地価の高さから土地の所有権を取得して保全するやり方は限界があります。土地の所有権をどう理解し、整理したらいいのでしょうか。

（2）里山を保全する担い手としての「地域住民」をどのように考え、地域の発展とどのように結びつけたらいいのでしょうか

（3）里山保全に必要な経費について誰がどのように担い、分担のルールはどのように作り出したらいいのでしょうか。

こうした課題について解決の方法を考え、現代の社会経済状況に相応しい里山保全への道筋を確かめることを目的とした、セミナーを開催します。

講師は鳥越皓之氏（筑波大学教授）と内山節氏（哲学者）です。

日時：11月21日（日）10:00～16:00

場所：明治大学大学院南講堂

（東京都千代田区神田駿河台1）

参加費：500円

問い合わせ・申込：

電話042-947-6047 / FAX 042-947-6057

（（財）トトロ口のふるさと財団事務局 永石・佐藤）